「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

◎取　組　分　野：【食】、【交流】

1．都道府県、市町村　高知県黒潮町（くろしおちょう）

2．事　業　者　名　黒潮カツオ体験隊

3．取組みの名称　カツオのタタキづくり体験

4．取　組　概　要　等

◇概　要

本取組は、平成12年、高知県の県民参加の予算づくり事業に旧佐賀町（現黒潮町）漁協女性部が「カツオのタタキづくり体験」の企画を提案したことに始まる。同年、**女性部は漁協や観光協会、商工会等地域全体を巻き込み、ホテルのオーナーや旅行会社等、40人を募集し、カツオのタタキづくり体験のモニターツアーを実施したところ大好評を得た**。事業化への手応えを確信した女性部は、平成13年に農協や商工会の女性部らを含む住民グループ、「黒潮カツオ体験隊」を組織し、修学旅行生や一般の受け入れを開始した。行政からの資金的な援助は受けずに、自力での営業を行っている。

当初の活動は漁港内の仮設テントで行われていたが、平成15年に交流施設としてカツオふれあいセンター黒潮一番館が完成し、天候や衛生面の心配が解消され、250人程度までの受け入れが可能となった。平成16年には活動の一環として喫茶部の営業も始めている。

カツオのタタキづくり体験は、地元のカツオの普及と、県内外の人との交流による地域活性化を目的として始められた。

体験では、魚のプロである漁業者らのレクチャーを受けながら実際にカツオを捌き、藁で焼いて皿鉢への盛りつけまでを行い、その後、タタキに加えスタッフが用意したアラの塩焼きや天ぷら、吸い物等で食事をする。体験ができるのは3月から11月で、所要時間は1回2時間、料金は1人3,150円である。カツオは市場から購入し、スタッフとなっている女性部員や漁業を引退した漁業者は、体験の人数により招集される。

雑誌等の取材は積極的に受入れ、ＰＲに努めるとともに、町や観光協会とも連携を図りインターネットによる受入れ窓口の設置等の体制づくりを行っている。集客範囲は関西、広島、岡山、関東等広域にわたり、**体験者数は平成13年度487名、14年度800名、15年度1,779名、16年度2,097名、17年度3,001名と順調に伸びている**。

◇活動の規模

項目		H13	H14	H15	H16	H17
売り上げ		1,260	2,520	5,603	6,605	9,453
	解説	単位：千円				
来客数		400	800	1,779	2,097	3,001
	解説	単位：人　平成15年10月に施設完成				
イベント回数		4	4	5	5	5
	解説	単位：回　大きなイベントのみ記述				
イベント参加者		5,700	7,000	8,000	9,000	5,000
	解説	単位：人　H17年度については、天候不順のため中止イベントあり				

◇活用している地域資源

黒潮町（旧佐賀町）の主な産業は「カツオ一本釣り漁」を中心とした漁業である。カツオ船は19トン～50トンが10隻、79トン以上が10隻あり、なかには日本一の水揚を誇る船もある。また、毎日漁港に戻る日戻り漁も盛んで、釣ったカツオがその日のうちに水揚げされ、とびきり新鮮なカツオが佐賀漁港をにぎわせている。

新鮮なカツオを使った「カツオのタタキづくり体験」では、黒潮町に伝わる昔ながらのタタキづくりを通して、黒潮に育まれた私たちの漁師文化を体験することができ、また、第1・第3土曜日に開催している「土曜びんび市」ではその日に釣ったとびきり新鮮な魚を安価で提供している。

◇地域活性化のポイント

カツオのタタキづくり体験は、地元のカツオの普及と、県内外の人との交流による地域活性化を目的として開催している。また、活動を通して、来訪者と地域住民との交流はもちろんのこと、世代や性別を越えたスタッフ間の地域内交流も活発になっている。さらに、**漁業を引退した方々が、来訪者に魚の捌き方を教えることで「先生、先生」と慕われ、活動を生き甲斐と感じ出番を心待ちにする状況も生れてきている**。

◇事業の今後の展開方向

高知県西南・幡多地域６市町村（四万十市（旧中村市・旧西土佐村）・土佐清水市・宿毛市・黒潮町（旧佐賀町・旧大方町）・大月町・三原村）では、幡多広域観光協議会を設置し、足摺岬周辺海域でのクジラウォッチング、四万十川のカヌー、カツオのタタキづくり体験、天日塩作り等の様々なメニューを連携させ、幡多地区をセットで売り込むための観光ルートを構想している。